

借用語に於ける言語の変遷

— 英語に於けるフランス語からの借用語 —

大 森 信 子

この論文の構成について簡単に述べると、まず第一章では、借用語一般の定義付けがなされている。そして借用語をひきおこす原因として何らかの意味での「優越性」をあげている。この借用されたる語が、使用者をして一層大なる変化を獲得せしめ、多くの精妙な思想の陰影を表現する方法を発見させ、これによってその国語を豊富にしたということは否定出来ぬ事実であって、こういう借用語の価値は簡単に結論づけられるものではない。これを解決するためには、或特殊の概念を表現する方法として自国語にどれだけの資料があるかという点に結びつけて、各外国語の名称の長所短所の一々を考慮する必要がある。そこでこの論文では、特に英語に於けるフランス語からの借用語を各分野に於てながめ、それが英語という一つの言語を如何なる方向に変遷させていったかを見る。第二章以下は、フランス語が英語の将来に永遠の重要性を有し来った点を取扱い、その影響を明らかにする。その第一として第三章では、借用語の種類、1.政治用語、封建用語、宮廷用語、2.軍事用語、3.法律用語、3. 教会用語、5. 一般的意味の語、6.食事用語、7.娯楽、狩猟、勝負に関する用語、8.服装に関する用語、9.芸術、建築職業に関する用語、10.日常語、医学に関する用語（以上名詞）、11.形容詞、動詞を詳細に調べその影響を知る。次に第四章では、これらのフランス語がいつ頃入ってきたのかを、

「11世紀以来の英語に於けるフランス語からの借用語の頻度」を示す表によって征服の時期と、言語上への影響の強くみられる時期とのずれを示す。かようにして流入してきたフランス語が本来語（英語）の上でどのような展開をしたか、又それがどのような変化を英語に与えたかを、意味・形態・音声の上からながめている。最後に syntax に与えられた影響をみて、Whitney が「文法的構造まで混合した国語という様なものは、かつて語学研究者の認識にのぼったことがない。こんなものは、彼等にとっては一つの怪物であろう。それは不可能だと思われる。」(Language and the Study of Language) という意見に対し、誇張ではないかという意見で結んでいる。

参 考 文 献

- | | |
|--------------------|-----------------|
| Otto Jespersen | 英語の生長と構造 |
| Otto Jespersen | 言語（その本質・発達及び起源） |
| Fernand Mossé | 英語史概説 |
| Leonard Bloomfield | 言語 |

文責 萩 田 時 子

現代英語における

否 定 表 現 の 一 考 察

那 須 博 之

発話や思考の基本的な要素である否定の概念とは、どのようなものであろうか。その表現に含まれた種々多様な否定概念の語相を追求し、ひとつの形にまとめ上げようとする意気込みで私は論文にとりかかったが、できあがって残されたものは、目を覆いたくなるような代物であった。もともとテーマの選択を誤ったのではないかと、私は思っている。短期間で扱うには大き過ぎ、しつかりと捉えるには焦点を合わせるのが困難過ぎるであろうから。いま考えてみて、あれ以外にどうしようもなかったと自身に言い聞かせてみても、時と共に悔いは大きくなる一方のようである。

ところで、否定 (negative) は肯定 (positive, affirmative) の対立概念であるが、数字のいわゆる <positive-negative> の概念とはかなり意味合いが異なっている。〔-1〕というのは〔1〕以外のすべてを意味しないし、また〔1〕以下という意味でもない。それは数直線上において〔0〕を規準とした〔1〕の対称点であるに止まる。

ところで〔unhappy〕は（幸福であること以外のすべて）を意味し、〔not four〕は多くの場合、〔4以下〕（例えば、I don't have four meals a day）の意味となるのである。

<happy-unhappy>, <possible-impossible> 等のように矛盾する概念をあらわす対応を論理学者は矛盾事項と呼ぶ。矛盾事項は二つ合わさると、存在するすべてを包含する。このような概念をあらわすのに、言語では、否定的接頭辞を前接した派生語、あるいは